

雑感

随想



江川守弥

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

△若者に夢を▽
 百人の生徒を学力テストで評価すれば、一番から百番までの序列はつく。しかし序列のドン尻でも清らかな真面目な気持ちで生きていく強い意欲を持たせたい。父母の愛と自然の加護により、この世に生まれたことがすでに何億倍の競争率に勝った証拠なのだ。エリートとしてこの世に生を受けたのだ。職業は何を選んでもよい。親子の信頼と心友関係を大切にして自信を持たせ、生命を大切にせよと教え、世界の社会人として公德心をよく守らせ若者のびのびと生かしてやりたい。創造力や情熱や勇猛心を持っている若者を信頼し、若者に託したい。心が空で外見だけに気をとられて生きては哀れだ。反対に立派に生きている若者も多

い。今年成人式に臨み若者の集団と接触してこのように感じた。
 △さわやか▽
 今夏の甲子園大会で実にさわやかだったのは西東京代表の都立国立高校であった。全国屈指の進学校でありながらよくも知徳体の三位一体、教育の理想を具現し強剛相手に堂々たる好試合を演じた態度に、よくやっさと心の中で嬉し泣きした人は全国で多かった。本当にすがすがしい一コマであった。
 △酔いかた▽
 次に考えさせられたこと。先日タクシーに乗ったときの運転手氏のお話。意外に思うことの中で、宴会後泥酔された学校の先生を乗せて家まで送るとき、昔教壇に立たれた尊敬した先生のこれが酒に酔った姿かなとわが目を疑

いたくなるような時があります。もっともこの運転手さんは私が教育に関係していることも知らない年齢三十歳ぐらいの真面目そうな青年であった。酒量が程度を越せば酔うに決っているわけだが、酔いかたにいろいろタイプがあるので、先生となれば教養を要求される場所であろう。他人のことのように思われなく聞いたものだ。
 △すがすがしいもの▽
 東京の国電の中の出来事。混んでい

る電車に一人の老婦人が乗り込んできた。もちろん、空いている席は一つもない。老人もこの混み具合をみて、そっと人混みの中に立っていた。ところが、この老人をみつめた二十五歳ぐらいの女の人が、すぐに立ち上がって、「どうぞ」と自分の席をその老人に譲ってあげたのです。老人は「ありがとうございます」と礼をいって、その席にかけた様子。すると、隣の席にかけていた中年の男性が、いきなり立ち上って、いま席を譲ったばかりの女性に向かって「私は男ですから、立っても平気です。どうぞおかけ下さい」と自分の席を譲った。若い女性は最初遠慮していたが、男性の強いすすめで、お礼をのべ席にかけた。
 このやりとりを見ていた満員電車の乗客は、自分がかけてもらったよ

（会津坂下町教育委員会委員）